白河高校新聞

発行所
白河市南登り町54
福島県立白河高校
出版委員会
委員長　大竹　翔
☎0248(24)1116

白高百年の節目

記念式典、盛大に挙行

令和４年10月22日、本校創立百周年の集大成とも言える「福島県立白河高等学校創立百周年記念式典」が白河文化交流館コミネスで開催された。卒業生をはじめとする、国内外で活躍している本校ゆかりの来賓を迎え、晴天の下、本校の生徒会の司会・進行で式典は盛大に挙行された。

まずオープニングを飾ったのは、本校の特製ビデオ「登龍～白河高校百年の歩み」であった。部活動の活躍、校舎と生徒の変化、素晴らしい進学実績、などが放映されたのち、国歌や校歌を全員で黙唱した。

最初の式辞で矢森健一校長先生は、旧制中学校時代からの激動の時代を駆け抜けた本校について語り、在校生には広い視野をもって粘り強くあり、本校のスローガンである質実剛健を目指して成長していってほしいという旨を述べた。次に、鈴木雅文実行委員長から白河高校のさらなる発展への祈念、福島県教育委員会教育長からは、生徒の主体性の大切さが述べられた。続いて、福島県副知事、県議会議長からの祝辞では、登龍の精神のもと卒業し、現在も活躍し続けている2万5000人の卒業生のように、様々な分野でリーダー的存在になるよう在校生に訴えかけた。また、本校の卒業生である白河市長は、実行委員会への感謝を述べた後、努力が必ずしも結果に結び付くとは限らないが、それでも努力し続け、果敢に挑み続けることの積み重ねで、その努力、成果が花開くことを強調した。さらに、強さと優しさを身に付けることの重要性も説いた。福島県高等学校長協会長は、生徒にぜひとも自信をつけてもらいたいと述べた。

次に、感謝状の授与式が行われた。本校に嶋倉文庫の本、書、日本画を寄贈した嶋倉氏、遠藤氏、今井氏にそれぞれ感謝状が贈られた。さらに、本校の発展に寄与したとして33代目から36代目までの歴代の校長にも感謝状が贈られた。生徒代表挨拶として、本校の生徒会長である宗田大河さん（2―3）は、「卒業していった先輩方のようになり、誇りをもって、百年先も本校に残り続けるような新たな伝統を在校生一人一人がつくっていきたい」と締め括った。

この式典の最後に、明治大学の教授であり、各種メディアでも活躍する齋藤孝先生の講演会が行われた。その講演会の演題は「人間関係をつくるコミュニケーション力」で、現代社会はコミュニケーション能力が求められているだけあって、未来に向けて成長し続けている在校生の登龍健児たちだけでなく、本校教員や来賓も熱心に傾聴していた。齋藤先生の講演はその場にいた人々を惹き付け、深い学びを与えてくれた。90分という短い時間の中ではあったが、講演を聞いた全員が、期待を上回る、大きな学びを得ることができた。

この式典の中で祝辞を述べた人のほとんどが、在校生である私たちのこれからの成長への期待を述べる際に、本校の校歌の歌詞などを引用していた。例えば、「経世の任は重かるを」という歌詞には、人々を救い、より良い世の中にしていくために前進し続けてほしいという期待が込められいる、などだ。この式典を通して、生徒の多くは白河高校生である自分自身が、登龍健児であるという誇りをもちながら、大志を抱き、常に努力し、前進し続けることが求められていると気づかされた。

祝辞を述べる生徒会長

論説

努力と不平等

２023年の大学入学共通テストの倫理で「不平等」に関する問題が出題された。その問題は高校生のGとHの、ある豪邸の前での「こんな家に生まれた子供は運がいいね。不平等だな」という会話から始まる。Hは、個人が選べない、「生まれ」で差があるのは仕方のない不平等であり、社会で成功するかどうかは本人次第とGに主張する。それに対しGは、「家が裕福なおかげでいい教育を受けて、将来お金を稼げるようになったりするでしょ」と社会で成功するかどうかは「生まれ」の運次第であると反論する。

この問題はいわゆる「親ガチャ」について取り上げている。「親ガチャ」という言葉は、子供がどんな親のもとに生まれるかは運次第であり、その結果によって子供の人生が大きく左右されることを、スマホゲームの「ガチャ」に例えたインターネットスラングである。家庭環境が良好で、経済的に不自由のない家庭のもとに生まれることは「当たり」とされ、子供への虐待や過干渉が頻繁に行われたり、最低限の健康的な生活が営めない程の貧困な家庭に生まれたりすることは「はずれ」とされている。

「親ガチャ」の当たりはずれの基準は「家庭環境の状態」と「親から継承されるもの」の大きく２つに分けられるが、今回の問題は後者にあたる。「親から継承されるもの」とは、主に親から得る経済資本と文化資本のことだ。文化資本はフランスの社会学者ピエール・ブルデューによって提唱された、お金ではない資産のことである。文化資本は次の３つに分けられる。絵画、楽器、本などの「客体化された形態の文化資本」、言葉遣い、ふるまい方、センスなどの「身体化された形態の文化資本」、そして、学歴、資格などの「制度化された形態の文化資本」だ。例えば、たくさん本が置いてある家で育った子供は本が好きになったり、正しい言葉遣いの教育を受けた子供は気品のある言動をするようになったりなどだ。また、学業での成功はこれら文化資本と直接的な関係があり、家庭で鍛えられた読書習慣や勉強習慣、コミュニケーション能力がそうである。そして、その学業での成功が人生での成功につながる。つまり、教育意識の高い親のもとに生まれ、幼い時から勉強し、私立の名門中高一貫校を経て高学歴を獲得した、というのもれっきとした親から継承した文化資本と経済資本の賜物であると言えよう。

高学歴、高収入の親の子供が高学歴になりやすいというのは『社会階層と社会移動全国調査』の結果から明らかだ。『社会階層と社会移動全国調査』とは、１９５５年から始まった日本社会おける社会経済的な不平等についての大規模調査である。その論文のひとつの「世帯所得と子供の学歴」の全６９３家庭を世帯収入別に調査した「少なくとも子供１人が大学へ進学した家族の比率」によると、世帯収入が３１３万円の子供の大学進学率が５０・０％なのに対して世帯収入が９３８万円以上の子供の大学進学率は８２・９％であり、ここから経済的豊かさで子供の学歴に大きく差ができることが分かる。さらに、両親の学歴別にみると、世帯収入が３２５万円から６８８万円の家庭のうち、両親がともに中卒または高卒の子供の大学進学率は４２・７％であるのに対し、父または母が大卒である子供の大学進学率は７２・０％、両親ともに大卒だと１００％であった。ここから親の学歴でも子供の学歴に大きく差が生まれることが分かる。

また、現代の日本社会において、学歴の獲得は好待遇な職業の獲得に大きく関わっている。厚生労働省が公表しているデータによれば、大卒の平均年収は約４３０万円、高卒は３３０万円と大卒と高卒との間にはおよそ１００万円の年収の差がある。さらには同じ大卒でも、卒業した大学の違い、いわゆるヨコの学歴でも収入に大きな差ができる。つまり、子供は生まれ次第で、学歴の獲得、ひいては富の獲得の難易度が大きく違うのである。

だが、「生まれによる子供の将来の経済格差」というのはあくまで統計上の傾向であって、「生まれで人生が決まる」わけでは決してない。人生というレースにおいて、「生まれ」は言わば初速度であり、そこから加速するか減速するかは、本人の努力次第である。実際に、社会資本を提唱したブルデューも、田舎の村から苦学してパリの名門大学を出ている。確かに、それら文化資本の格差を努力で埋め合わせるというのは大変なことである。しかし、これを誤解して、何をしても無駄だからと努力を怠るのは非常に愚かな行為であると言えよう。

人生は、共通テストの問題のGが主張するような、その内容はすべてその人を取り巻く環境によるものとする社会決定論や、Hが主張するような、その内容はすべてその人によるものとする自己責任論のどちらか一方で片づけられるほど単純なものではない。人は生まれながらにして不平等であるが、「努力」は全ての人に等しく与えられている。自分の理想を実現させるには、それに負けずに努力することが求められる。「努力は報われる」とは限らないが、成功には努力が必要不可欠なのだ。

（鈴木　樹）

創立百周年記念誌の裏側へ

制作者インタビュー

去年の10月に刊行された白河高校創立百周年記念誌について、その制作の中心である鑓水実先生にお話を伺った。お話の中では制作にあたっての苦労や楽しさ、工夫、かけた思いなどが語られた。

Q　百周年記念誌制作のきっかけはなんですか？

A　白河高校では、10年ごとに周年記念誌を刊行してきました。今回は百周年という最大の節目を迎えるにあたって、これまでの集大成としてこの記念誌を制作することになりました。

Q　制作にはどのような方々が携わっていますか？

A　中心となる沿革史は、主に卒業生が執筆しました。具体的にはこの学校に造詣の深い教員、大学准教授、文化財に詳しい学芸員の方などにお力を貸していただきました。

Q　制作にはどのくらいの期間を要しましたか？

A　完成まで2年半ほどかかりました。

Q　記念誌の中で一番注目して欲しいところはどこですか？

A　まずは、沿革史ですね。今回の記念誌を制作するにあたって、戦時中の旧制白河中学校について色々調べて、新たな事実も判明しました。また、各部活動の歩みをひもといていったのですが、部活動ごとにその部活動の先生方に調べていただきました。次に、座談会でのインタビューです。白河高校を卒業した後、様々な分野で活躍している方々に、高校時代についてお聞きしました。

Q　制作時に苦労したことはなんですか？

A　コロナ禍で、執筆に携わる人たちが全員で集まって作業をするということがなかなかかなわなかったことですね。また、沿革史の各部活動の歩みで各部活動の先生方が本当に細かいところまで調べて文章にまとめてくださったのですが、字数制限などの関係からどうしても省かなくてはならない箇所がありました。そのことは本当に心が痛ましく思いました。

Q　この記念誌制作にかける思いはなんですか？

A　私自身白河高校の卒業生なので、そのことを誇りに思って、高い意識とモチベーションでこの記念誌制作に参加しました。

Q　制作していて楽しかったことはなんですか？

A　やはり先程も述べた、新しい資料の発見で、歴史の書き換えができたことです。あとは、本校を卒業し、様々な分野で活躍している同窓生との出会いです。

Q　記念誌を読む人たちに届けたいメッセージはなんですか？

A　登龍魂です！高い志を持って、それぞれの夢に挑戦してください。

Q　この記念誌の配布は校内だけですか？

A　いいえ。高額寄付をしてくださった方々にもお配りしました。また、県内全ての高校、白河市内の全ての小中学校、卒業生が進学した主な大学、県内の主な図書館、さらに国立国会図書館にも寄贈しました。

Q　学校以外での販売はしていますか？

A　はい。昭和堂書店さんでお求めいただけます。値段は1万円ほどで、DVDも1000円で売っています。

加えて鑓水先生は、一緒に別冊として刊行された「星六つ」も読んで欲しいと語った。1955年に起きた甲子山遭難事故について初めて編纂された冊子である。

取材の最後に鑓水先生は「白河高校が所有する貴重な美術作品なども収録し、『今までになかったものを作りたい』というたくさんの方々の思いで制作されたこの記念誌をぜひお読みください」と結んだ。

記念誌への熱意を語る鑓水先生

地道に制作された記念誌と星六つ

白高生としてできること

紡ぐべき記憶を後世へ

しらかわゼミをご存知だろうか。本校が去年から始めている活動のことで、福島県の復興などについて自分たちで考え、話し合い、調査を行っているゼミである。今回はそのしらかわゼミについて鈴木琢真先生にお話を伺った。

しらかわゼミの主な活動内容としては1年生は主に小峰城復興についての調査を、2年生は他校に訪問して互いの意見を交換し、互いの考えを深め合う活動をしている。そのような活動を行う中で、人と人とのつながりを作りこれからの人生に活かしていくこともこの活動の大事なことだと鈴木先生は語っていた。この活動を通して自分とは違った面白い意見や気づきがあるのだという。鈴木先生自身、他県にとって震災は一般的に知られているぐらいのものだと思っていたのだが、思っていたより他県の皆さんが気にかけてくれていて驚いたらしい。その他にも栃木県の大田原高校と交流会を行った際には、世間では原発処理水海洋放出のことが問題視されていると思っていたが、栃木では土壌汚染の方が問題視されていたことなどがあったという。

鈴木先生はこの活動について、好き勝手かつ大胆に挑戦していくことが大事だと語っており、これからこの活動の規模を大きくしていきたいとも語っていた。

ここがすごい文化部

第４回　書道部

各種大会で全国大会に何度も出場するといった輝かしい成績を残している書道部について紹介する。

それにあたって書道部の部長である小山田理奏子さん（２―１）にインタビューを行った。書道部は平日放課後に書道室で活動している。小山田さんによると、書道部では終了時間を自分で決められるため、自分の納得できるまで作品を書き続けられることが部活動をする上での良い点であるという。書道の主な大会には、七夕展、書き初め展、県総文祭などがあり、中でも県総文祭は全国につながる重要な大会とのことだった。

小山田さんは書道部の活動のやりがいについて多く語ってくれた。書道をしているときはうまく書けなかったり、納得できなかったりすることがあるが、書き続けていく過程の中で自分の納得いくものが完成した瞬間が書道をやるなかでのやりがいだと語っていた。期待するものに近づいていく感覚も、書道をする中での喜びを感じる瞬間だという。加えて、前の作品と見比べて上手になっていることが実感できた時もやりがいのひとつだと語っていた。

今まで書道の道を歩んできた中で、素晴らしいと思った人についても尋ねてみた。小山田さんは同じ書道部の小湊梨々花さん（２―４）の名前を挙げてくれた。小湊さんは仮名文字という書体で作品を書いているという。その仮名文字という書体がそもそも難しいらしく、形を最後まで崩すことなく作品を書き上げられる技術と、半日作品を書き続けることのできる集中力こそが、小湊さんの強みであり素晴らしい点だと意気揚々と語ってくれた。書道経験があまりない人でも粘り強く制作するということがいかに困難なことか理解できるのではないだろうか。一本の筆を握り、一枚の紙に向かって字を書き続けるという行為は並大抵な努力と集中力でできることではない。

小山田さんが実力を向上させるためにどのような工夫をしているのか尋ねてみた。小山田さんは、妥協せずに書き続けることが実力をつけることへの近道だと語っており、小山田さんの書道に対するやる気ある姿勢や熱意が垣間見えた。友人の作品を参考に自分の過去の作品を見直すなどして学ぶこともあるという。練習に重きを置く姿勢を見せてくれた。

小湊さんの作品『臨　針功』

充実の修学旅行

３年振り関西へ

２年生は、10月４日（火）から７日（金）までの４日間、修学旅行で関西を訪れた。新型コロナウイルス感染症によって旅行自体が難しい局面であったり、旅行先の変更を余儀なくされたりした時から実に３年振りの関西方面への旅行である。出発前の計画的な生徒自身による準備や先生、旅行会社の方の尽力によりこの旅行が実現した。

１日目の早朝、新白河駅から新幹線に乗り込み、東京駅で乗り換えをしたのち無事に京都駅に到着した。その後クラス別の研修に移り、清水寺や嵐山など京都市内の名所を訪ねた。２日目には京都市内で班別自主研修を行った。それぞれの班が事前の計画をもとに交通機関を利用し様々な場所を訪れた。それぞれの生徒が有名な寺社仏閣に足を運んだり、お土産を買ったりなどして有意義な時間を過ごした。どの班も集合時刻に遅れることなく集合場所に集まることができた。３日目の午前にはクラス別で奈良公園や興福寺など、奈良市内の観光地へ向かい、見学や散策を楽しんだ。午後からの大阪市のユニバーサル・スタジオ・ジャパンでは、生徒たちは園内のアトラクションやキャラクターに目を輝かせながら夕方までの自由時間を満喫した。最終日である４日目は全クラス共通で平等院と東寺を訪れた。東寺では、特別に公開の期間であったため五重塔の初層の中などを見学する機会が設けられた。午後に京都駅から新幹線に乗車し、東京駅で乗り換え、新白河駅で降車したのち各自解散となった。楽しい旅に終わりを告げるのを惜しむ生徒が多く見られた。

今回の旅行では何一つ大きなトラブルに見舞われることなく全生徒が帰路につくことができた。充実の旅行を終えた生徒たちは帰校したのち、各班ごとにレポートを作成するなどして活動報告をした。

清水寺での集合写真（2-2）

出版委員からの挑戦

一、章魚　六、海狸
二、烏賊　七、膃肭臍
三、松魚　八、海鷂魚
四、柳葉魚　九、翻車魚
五、海鼠　十、鯢

1位ゴールの瞬間

校内体育行事無事に開催

クラス、学年の壁を超えて

今年度、依然猛威を振るっている新型コロナウイルス感染症により様々な制限を受けていたなかで、スポーツ大会の開催がかない、駅伝大会も開かれた。今年度の駅伝大会は、実に３年ぶりの開催であった。

７月14日から15日にかけてHR対抗のスポーツ大会が開催された。新型コロナウイルスによる制限で開催できるか不安に思う生徒もいたものの、無事に開催することができた。生徒たちは各クラスごとに個性溢れるTシャツを作製し、クラスメイトとの絆を深め合い、白熱した試合を見せてくれた。１日目には卓球、バスケットボール、バドミントン、バレーボール、ソフトボールの予選が行われた。２日目は雨天により校庭でのソフトボールとリレーが中止になったが、室内の競技は予定通り行われ、本大会は幕を閉じた。自身のクラスが負けてしまっても他クラスを応援する生徒も多く、学校全体となってスポーツに身を投じた。生徒がクラスの壁を越えて親睦を深めた良い機会となった。

【卓球】
第1位＝3年3組　第2位＝2年4組　第3位＝3年2組、3年4組

【バスケットボール】
第1位＝3年2組　第2位＝2年4組　第3位＝3年6組、1年3組

【バドミントン】
第1位＝3年6組　第2位＝3年1組　第3位＝2年1組、2年6組

【バレーボール】
第1位＝3年5組　第2位＝2年3組　第3位＝2年5組、3年4組

【ソフトボール】【リレー】
雨天中止により順位決定なし

【総合順位】
第1位＝3年6組　第2位＝2年5組　第3位＝3年4組

◇

11月2日、郡内一周HR対抗駅伝大会が開催された。今年度の駅伝大会は新型コロナウイルス感染症の影響により、制限を受けていたなかで実に3年ぶりの開催がかなった。本校をスタート地点に西白河郡内約70kmをクラスメイトが襷を繋いで一周するこの駅伝は、73回にも及ぶ伝統のある行事だ。全生徒が一丸となってこの大会を作り上げるがしばらく開催されておらず、校内の1年生から3年生の生徒全員がこの行事を経験したことがなかった。そういった状況から、大会前日に行われた説明会でも大会遂行を不安視する生徒が多くいた。しかし、保護者や地域の方の協力を得て充実した大会となり、最後のクラスが学校に到着した際には、全員が互いの健闘を讃えた。

【優勝】2年6組　4時間52分02秒
【第2位】3年2組　4時間57分07秒
【第3位】2年5組　5時間00分07秒

新型コロナウイルス感染症の影響で今まで開催が中止されていた駅伝大会も、スポーツ大会とともに今年度は無事に開催することができた。選手も補助役員も一致団結してとても熱い行事となった。

しっかりと構える捕手

プラタナス

昨年の12月12日、「今年の漢字」が京都市の清水寺にて「戦」と発表された。年末恒例のこの行事は、その年の世相を表す漢字一文字を国民から投票で募り、1位を決める非常に注目度の高い行事だ。「戦」を選んだ応募者の理由は主に、ロシアのウクライナ侵攻、サッカーW杯での日本代表の活躍、そして、新型コロナウイルスや物価高への対応などであった。受賞理由を「戦」の字をあてて二字熟語で表現すると「戦争」、「善戦」、「苦戦」などであろう。このように「戦」のつくことばの多くは「戦争」をはじめとして荒々しいイメージや激しい争いを想起させるものが多い。しかし、全てがそうだろうか▼「戦く」という言葉がある。「おののく」と読み、「恐れや不安のために、体がわなわなふるえる。わななく」（広辞苑）という意味だ。これは「戦争」のイメージにはそぐわない。同じ漢字ながら、「戦争」の荒々しいイメージとはまるで対極的だ。「戦」という用いられる漢字は同じでも、言葉によって全く逆の意味を持つのだ▼見たことのない漢字を前にしても、部首や語の組み合わせからある程度意味を推測できる、とは一帯に言われるが、果たして「戦く」の意味を知らないとき、この行為は通用するだろうか。この行為は分からない言葉を目にした際、意味を考察するのに非常に効果的であるが、反面、漢字の推測しやすいという特性を利用した「文字上のステレオタイプ」とも言える。自分の持ち合わせている語の意味・イメージだけを頼りに言葉の意味を決めてしまうこの行為は、意味を推測する際、正確ではない危険性がある▼この場合、筆者は文脈から意味を推測することが大切だと考える。古語には一つの語で全く逆の意味を持つ言葉がいくつかある。「おぼろけなり」は「並一通りだ」という意味と、反対の「並一通りでない」という意味を持ち、これを現代語訳する際には、文章の一部だけでなく全体や流れを掴み総合的な判断をするのが求められる▼これは日常生活でも共通して肝要だと言える。一つの側面だけに拠って、その人の行動や人柄を決めつけてはいないだろうか。その人の全体像を把握し、様々な側面を考慮に入れ、対等な見地から総合的な判断を下すことが対人関係の鍵なのだ。

（大竹　翔）

湯田統真選手インタビュー　感謝を胸に初優勝へ

令和４年度の夏の甲子園で優勝した仙台育英高校。その部員の中でも県南出身である湯田統真選手に、日頃の練習や甲子園当日の心境、これからの意気込みなどの話を伺った。

湯田選手は現在高校２年生でありながら球速最速146キロの剛腕で甲子園だけでなく、秋の明治神宮野球大会などでも活躍している。好きな言葉は、引き締まっていて凛々しく勇ましいという意味を持つ「英姿颯爽」。好きな食べ物はいちごであったり、好きな音楽はJ－POPであったりと、高校生らしい一面も見せた。目標としている選手は北海道日本ハムファイターズ所属の北山亘基選手。中でも、北山選手の最速156キロのストレートを目標にしているそうだ。球速を150キロに上げることを年内の目標にしており、また、コントロールもさらに正確にしたいと、日々の練習に一生懸命取り組んでいる。

湯田選手は毎日14時から18時30分まで練習をしており、自分の課題に合った個人の練習を特に頑張っている。練習での課題は、体の柔軟性とキレを増すことで、体を柔らかくするストレッチはもちろんのこと足腰を鍛えるためにスクワットなどの筋トレをしているそうだ。湯田選手の強みは、一度決めたことは何があってもやり遂げることであり、練習のことを考えすぎてたまに夢の中でもピッチングをしていると笑顔を向けた。

小学校４年生から野球を続けている。小学校は泉崎第二小学校に通っていて、幼い頃から野球の全国大会を夢見ていたそうだ。中学校は泉崎中学校に通っていて、県大会の上位を目指していた。しかし、当時野球部の同級生がいなかったため自分自身と向き合って練習に励んでいたそうだ。そして、仙台育英学園高等学校に入学してからは、野球と真剣に向き合っている同級生や先輩達と巡り会い、自身の野球に対する意識も上がったのだという。沢山の練習方法や考え方を仲間同士で共有し合い、自分に合ったやり方で共に切磋琢磨し合っている。湯田選手いわく、仙台育英は本当にスポーツの設備が充実しており、環境のせいには絶対できないので成長しないのは自分が悪いという気持ちで練習に励むことができるのだそうだ。

そんな湯田選手には毎日欠かさず行っているルーティンがある。朝起きて、ご飯を食べて、体操をして走るというものだ。試合がある日にもこのルーティンは崩さない。こうすることで生活リズムが良くなるだけでなく、普段やっている行動をすることで、緊張せずにいつも通りのプレーができるそうだ。

夏の甲子園当日、球場に入った時、グラウンドの土や芝生がとても綺麗に整備されていて、迫力があったという。試合の前日は対戦相手の分析や対策をして、チームでの志気を高めていたそうだ。初戦の仙台育英対鳥取商業の試合で初めてグラウンドに立ちボールを投げた時、意外と緊張することがなく、ここが野球の聖地なのかと感動していたそうだ。準決勝の仙台育英対聖光学院の試合にも湯田選手はグラウンドに立ち、見事なピッチングで相手のバッターを抑え、18対４の大勝利を果たした。その結果、仙台育英は７年ぶりの決勝進出を決めた。湯田選手は合計で３試合に登板し、チーム一丸となり力強く球を投げた。そして、甲子園の決勝、仙台育英対下関国際高校の試合で８対１で勝利し見事日本一となった。湯田選手は決勝戦には出場しなかったものの、競技人生で一番印象に残って楽しかった試合だったと誇らしげに語った。

２０２２年に様々な経験を積んだ湯田選手は、選抜高校野球大会へ向けて今までの練習の成果や経験を糧に、培ったものを最大限に発揮できるよう頑張りたいと意気込んでいた。また、今一番感謝している人は両親だと照れくさそうに言った。直接会うことはあまりできなかったがいつも試合の応援に来てくれていたそうだ。湯田選手の父親は仙台育英の野球部のＯＢであり、１９８８年の選抜高校野球大会の出場経験がある。２０２０年に新型コロナウイルス感染症の拡大防止のために夏の甲子園大会が中止になったり、遠征にも行けなくなったりして多くの制限がある今、湯田選手は早く感染症の流行が終息してほしいと願っているのはもちろんのこと、その中でも野球をやらせてもらってるという事はとてもありがたいと、感謝の意も示した。感謝を忘れず、努力を惜しまず、謙虚な心を持ち、気迫ある姿を見せてくれた。

笑顔で質問に答える湯田選手

白高、歴史を重ねて

本校の校歌は、本校が旧制白河中学校であった時代に、本校の第２代目の校長である工藤正勝氏（大正12年～昭和４年まで勤務）が生徒を登龍健児と見立てて作詞をし、「故郷」や「春の小川」等の名曲で知られる岡野貞一氏が作曲を手掛けた。本校の校歌は今日も、90年以上変わらぬ歌詞とメロディが歌い継がれている。学校の校歌は太平洋戦争後の教育改革を境に、戦前の男子校によく見られた軍国調や女子校によく見られた良妻賢母思想の影響を受けた歌詞の内容を改めたり、学校の共学化に伴って歌詞が変更されたりした。そのため、校歌が今迄一度も変化していないことは稀有であると言えるだろう。

本校の教員である鑓水実先生によると、本校の校歌は第１番～第４番まで、全ての歌詞が非常に文学的なものであり、往古来今歌い続けることのできる校歌なのだという。「西秀麗の那須の峰」より始まる１番の歌詞は、阿武隈川や小峰城など、白河市の風土を連想させるものが歌詞に含まれており、白河市の歴史や伝統を想っているものとなっているそうだ。「見よ県南の一聖地」より始まる２番の歌詞には、文武両道の精神や質実剛健の気風（中身が充実して飾り気がなく、心身共に強くたくましい様）によって人間的に成長して欲しいという願いが込められているという。「春乾坤に回りては」より始まる３番の歌詞は、白河市の四季や生徒の将来への願いが綴られており、蛟龍（生徒）が白河市から五彩（各々が選択した道）に向け、登龍となって飛び立ってほしいという願いが込められているそうだ。「さらば我友奮わずや」より始まる４番の歌詞には、学校を卒業した後の未来へ向けてのエールが綴られているという。歌詞中の「経世の任は重かるを」には世の中の役に立つ存在となって、どんな苦難にも負けずに立ち向かって欲しい、という願いが込められているそうだ。

令和４年度現在、感染症対策の一環として、始業式を初めとした集会では音源の再生のみとし、校歌を歌うことが叶っていない。伝統ある本校の校歌に込められた想いは今日まで受け継がれているため、在学中だけでなく卒業後も心に留めて置いてほしい。校歌に込められた想いを理解し、受け継いでいくことで、学校の魅力を高めることができるのではないだろうか。

校歌が力強く刻まれた石碑

心地よい空間作り
りぶらん　利用する際の注意点

白河市立図書館（通称りぶらん）は、子供から大人まで、地域住民を始めとした幅広い年齢層の人に利用されている。本校生徒を含む学生は、放課後や休日に、テスト勉強や受験勉強、そして読書をするために利用している。

しかしながら、図書館側が苦言を呈す問題がある。それは図書館の利用方法についてだ。館長によると、図書館を利用する生徒の中には、リュック等の荷物を開けたままだったり、教科書を広げたままその場を立ち去ってしまったり、勉強するスペースを確保するために予め荷物を置いていたりする生徒がいるという。荷物の中には名前等の個人情報が記載されているものもあり、それらを放置したままだと悪意を持った人物によってインターネット上に晒されてしまったり、持ち去られてしまったりする恐れがある。図書館は不特定多数の人が利用する公共施設であるため、そのような悪意を持った人物も少なからずいる可能性がある。だからこそ、防犯のためにも自身の荷物は特に大切に扱って欲しいという。席は限られているが、利用することを希望する人は多い。席は独占せず、譲り合って心地よい空間を作って頂きたい。

また、図書館を利用する際は「勉強」だけでなく「読書」にも時間を使って欲しいという。図書館の本には生きる上で必要な情報が多数ある。例えば電化製品を扱う際には、説明書を読むことが必要であり、それを正しく読みとることが出来なければ製品を正しく使うことができない。そのため、正しく読み取る読解力を養う必要がある。読解力は本を読むことで養われるため、数多くの本を読むことが必要となる。本校生は大学進学を目指す生徒が多い。大学へと進学すればレポートを書く機会が多くあるだろう。その際には文章を書く能力が必要となる。文章を書くにあたって、読書によって獲得した語彙の量と質は必ず役に立つだろう。

加えて、生活する中で困った事、知りたい事があった際は図書館の職員に気軽に相談してほしいという。その場合、図書館側は温かく対応するので、安心して利用してほしいそうだ。ただ、図書館自体は月曜日が休館日であるため、利用する際は注意が必要だ。未だ新型コロナウイルス感染症の脅威は消え去っておらず、図書館でも感染のリスク可能性は充分にある。施設内では、大勢で密集したり、騒いだりはせず、感染症対策を徹底してほしい。

百周年を祝う会開催
大きな節目の思い出作り

白河高校創立百周年を記念して、９月１日に白河高校内で「百周年を祝う会」が行われた。「創立百周年記念式典」とは別に、百周年に楽しい思い出作りがしたいという生徒たちの思いから生徒会が主体となって開催したものである。本会では、事前に収録したビデオメッセージを見たり、ステージ発表をしたり、校庭でリレー大会や長縄跳び大会をしたりした。ビデオメッセージは各部活動、各クラスで百周年を祝う10秒程度の動画を作り、それを繋げたものを各クラスで視聴した。各部活動はその部活ならではの特徴を活かし、各クラスはそのクラスのユーモアに富んだ、百周年記念に相応しいメッセージ動画となった。

また、本校のＯＢでもある高田良一先生と鑓水実先生へのインタビュー動画では、白河高校の歴史への理解を深めるとともに、我々が、先人から続く白河高校生であるということを再認識させてくれた。ステージ発表は新型コロナウィルス感染防止の観点から密集を防ぐため事前に撮影した動画をグーグルクラスルームで視聴する形になったが、教員や生徒によるダンス発表やバンド演奏、書道部による書道パフォーマンスなどで学校中を盛り上げた。自分の特技や努力していることを披露する、和気藹々とした姿がステージ上で輝いていた。

屋外では、７月のスポーツ大会にて悪天候により中止となったリレー大会と、本会のために企画された長縄跳び大会が行われた。リレー大会は、クラスの中で男子４人女子４人の計８人走者を選抜し、全学年でリレーを行った。長縄跳び大会ではクラス全員で長縄跳びをし、その回数で優勝を競い合った。リレー大会は２年２組が優勝で、長縄跳び大会は１年５組が優勝、総合優勝は２年２組だった。仲間の応援、掛け声、歓声でクラスが心を一つにして、白高中が大いに盛り上がった。

最後には生徒会役員が作成した記念動画や、教職員による「応援歌」、「花や一時」が披露された。条件こそあったものの、その中で存分に楽しみ、大成功を収め閉会となった。

ステージ発表でのバンド演奏

和歌と高校野球の聖地
白河の関

白河の関は、５世紀前半の大和朝廷の時代に、北方の蝦夷に対抗する前線基地として設置されたとされている。しかし、朝廷の勢力が北へ拡大すると、基地としての機能は薄れ、都から陸奥国への交通の要所とされてきた。その後、白河の関は「みちのく」を表す和歌の歌枕として使われるようになり、平安時代から江戸時代にかけて、松尾芭蕉の「奥の細道」を代表に、様々な文学作品に登場した。しかし、時代が経つにつれてその遺構は失われていき、明確な位置すら分からなくなった。そこで、１８００年ごろ、白河藩主の松平定信は様々な文献から考証し、白河神社のある場所が白河の関跡であるとした。１９６０年代に入ると発掘調査が行われ、実際に土塁や空堀などの防衛施設が確認され、「白河関跡」として国の史跡に指定された。

また、白河の関は高校野球の世界でも登場し、甲子園大会で東北地方の高校が優勝し、優勝旗を持ち帰ることを「白河の関越え」と表現されるようになった。東北の高校は過去１００年に渡って一度も優勝を勝ち取ったことがなく、「白河の関越え」は長年の悲願であった。そしてついに２０２２年の夏の甲子園で仙台育英学園高校が東北初の優勝を果たし、優勝旗が白河の関を越えた。今では、白河の関は歴史ファンだけでなく甲子園ファンからも愛される、白河の主要な観光地のひとつとなっている。

白河の関と刻まれた石標

登龍の晴
必要なコミュニケーション

図書館では荷物を放置したまま長い間席を離れてしまう人がいるという悩ましいことが起きている。ただ、「長時間荷物を放置して席を外してはいけない」というのは法律上遵守すべきものではなく「暗黙の了解」だ。わざわざ口で説明せずとも、あるいはされずとも、道徳上や社会的な観点から、破るべきでないと理解できる一般常識である。

筆者はこの「暗黙の了解」は、日本人特有の空気を読むという行為が密接に関係していると考える。空気を読むというのは、その場の雰囲気を察知し言葉を介せずして要求されていることを把握して実際に行動を起こすことだ。「暗黙の了解」は、様々な場面で人々が空気を読んでいった結果、直接言葉で示されなくとも守ってしかるべきものとして概念化されたものではないだろうか。

空気を読む行為の蓄積によって形成された「暗黙の了解」。前述した、長時間荷物を置いて席を外してしまう人は空気を読めばよかったのだろうか。筆者は、それだけでは不十分だと考える。ここで大切なのは空気を読むことと、言葉を介してのコミュニケーション、つまり会話だ。数人で図書館に来ているのであれば、荷物を置いて席を外す際に自分たちの行動について会話で是非を問うことができたはずだ。空気を読みながらも直接言葉を交えて「暗黙の了解」を守ることが肝要だ。

私たちは空気を読むという間接コミュニケーションと会話という直接コミュニケーションの両方を駆使することで、本当の意味で「暗黙の了解」を守ることができるのだ。

（大竹　翔）

本の紹介
『ダレン・シャン』
未来を決める運命の選択

あまり本に興味が無い、自分にあった本が分からない。そう思ったことが誰しも一度はあると思う。今回は、そんな人に筆者からぜひとも読んでほしい本を紹介しよう。筆者が今まで読んできた本の中で一番続きが知りたいと思った本だ。この本のおかげで筆者も読書に興味を持つことができた。ぜひ一度だけでも読んでもらいたい。

その本とは、白河高校の図書館にもある『ダレン・シャン』である。その概要をお伝えしよう。『ダレン・シャン』は12巻で構成された物語である。この物語はなんの変哲もない少年が非日常を送る物語だ。その少年の名はダレン・シャン。ダレン・シャンはある機会にフリークショーを見に行くことになる。彼はフリークショーに出ていた蜘蛛を必死に欲しがるようになり、欲に負けてついに盗んでしまう。しかし、その蜘蛛は猛毒の牙で彼の友達の首元を刺してしまう。怖くなった彼は蜘蛛を手放すためにサーカス団のテントに行くと、その蜘蛛の持ち主のヴァンパイアに待ち伏せされていた。そこでダレンは毒を消すためにヴァンパイアになるか、友達を見殺しにするかの二択を迫られる。ここからは彼の選んだ道の行く末を読者自身で見届けてほしい。この後にもダレンはいくつもの選択を迫られる。そんな時、読者のあなただったらどうするのか。そこを実際のダレン・シャンの行動と比較して読んでほしい。

クローズアップ白高生
今、この瞬間の輝きを

昨年12月４日（日）に行われた第41回福島県高校総合文化祭（総文祭）写真展において、関山翔太さん（２―４）の作品『約束の指輪』が全620点の作品の中で５点のみ選考される最優秀賞を受賞し、令和５年度全国高校総合文化祭に福島県代表として出場する。また、関山さんは同年10月にも第17回花見山フォトコンテストにて『大迫力』が全333点の作品の中のユース部門で最優秀賞を受賞している。

関山さんが写真の撮影を始めたのは高校に入学してからだ。関山さんは今回総文祭で輝かしい賞を手にしたが、中学生時代は写真にさほど興味は無かったそうだ。しかし本校のパンフレットで写真部があることを知り、興味を持つようになったという。また、高校に入学する際、親からカメラを買ってもらったということもあり友人と共に写真部に入部したという。写真部に入部してからは、部活動をするうちに写真を撮ることが楽しみとなり、徐々に撮影に没頭していったそうだ。その結果、撮影スキルも多くの撮影を通して向上していったという。

関山さんは最優秀賞を受賞した２つの作品を撮るにあたっての工夫として、『約束の指輪』は人間味ある〝エモい〟写真を撮りたいと考えていた時に光を使った写真にインパクトを受けて発想を得ました。指輪であれば光と人を上手く活かすことが出来ると思ったため、友人に協力をしてもらい、撮影をすることが出来ました。『大迫力』は桜を撮りに行った際、人と桜とを対比させて、作品を見る人に桜の迫力感が伝わるようにローアングルから撮影しました」と語った。『約束の指輪』に関しては総文祭へと出展するために何ヶ月も所蔵した「とっておき」なのだという。また、総文祭に出展する作品は枠組の出来も評価対象になるため、枠組みを含めた作品を完成させるのに時間がかかったものの、自分自身で納得のいく、より良い作品にすることが出来たと語った。

現在、関山さんは写真部の部長であり、部活では撮影に関する勉強会を開いたり、勉強会を元に撮影会を開いたりして部員の撮影スキルの向上を図っているという。関山さん自身は、多くの人に〝写真は鑑賞するだけでなく撮影することも楽しいことなのだ〟という魅力を伝えたいと考えているそうだ。

取材の最後に、関山さんは「これからも、高校生らしい青春を楽しんでいる写真を撮っていきたい」と語った。全国総文祭への出場を自身の飛躍の機会として捉える前向きな姿勢を見せてくれた。

タイミングを見極める関山さん

『約束の指輪』

出版委員からの挑戦　解答

一、タコ
二、イカ
三、カツオ
四、シシャモ
五、ナマコ
六、ビーバー
七、オットセイ
八、エイ
九、マンボウ
十、サンショウウオ

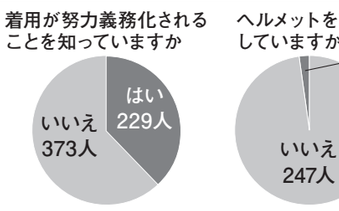
ヘルメット着用努力義務化へ
白高生の実態調査

令和５年４月１日より改正道路交通法が施行される。今回の改正は、いわゆる自動運転「レベル４」の公道での解禁が主な内容であるが、その他に、「自転車利用時のヘルメットの着用の努力義務」が新たに追加された。

警察庁の統計によると、令和３年中の自転車関連事故件数は、６９６９４件で前年より２０２１件増加している。また、全事故における自転車関連事故の割合は、平成28年以降増加傾向にある。さらに、平成29年から令和３年までに自転車乗車中の事故で亡くなった２１４５人の人身損傷部位を調べたところ、頭部を損傷した人が１２３７人と全体の58％を占めている。また、自転車乗車中のヘルメット非着用時の死者数に占める割合は着用時に比べて約2・2倍高くなっており、頭部の損傷が重大な事故につながりやすいことがわかる。

このように、ヘルメットの着用は重大な事故が起きる可能性を大きく減らすことができるが、白高生のヘルメットの着用率は非常に低い数値であった。出版委員会が白高生に対して行ったアンケートの結果によると、自転車で通学している生徒２５２人のうち、ヘルメットを着用しているのはわずか５人のみであった。ａｕ損害保険株式会社の調査による、全国の高校生の自転車利用時のヘルメットの着用率は12％であるのに対して、白高生の着用率は０・02％と全国平均を大きく下回っていることが分かる。

また、「ヘルメット着用が努力義務化されることを知っていますか」という質問には２２９人、全体の約４割が「はい」と答えた。この結果のように、ヘルメットの着用努力義務化は未だ全ての市民には知られていない。そのため、福島県がＹｏｕＴｕｂｅに広告として公開している交通安全啓発ＣＭをはじめ、各都道府県、警察は令和５年４月１日の改正道路交通法の施行に向けて、その認知度を高めるべくＰＲ活動を積極的に行っている。



発信、「推し本」の魅力

10月27日の放課後、視聴覚室にて「第３回校内ビブリオバトル」が開催された。この行事は本校図書委員会が主催となって企画や準備を進めたものだ。「ビブリオバトル」とは、発表者が読んで面白いと思った「推し本」について一人５分の制限時間内にその魅力を伝え、「最も読みたくなった本はどれか」を基準に投票を行い順位を競うコミュニケーションゲームである。

当日は50名ほどの生徒や教員が聴衆として会場へ足を運び、大会では古賀瑛士さん（１―１）、井谷峻さん（１―３）、藤島美優さん（２―３）、網藤みつきさん（３―３）の４人が発表を行った。発表の順番はくじ引きによって決められ、網藤さん、藤島さん、古賀さん、井谷さんの順番で各々が持ち寄った本を紹介した。網藤さんは『妖怪アパートの幽雅な日常』という本を紹介し、主人公に力を貸す妖怪たちの怖さよりも感動が勝る作品だと語った。藤島さんは、息子の登場により主人公の生活が一変する『ワーキング・ホリデー』という作品について深く魅力を伝えた。古賀さんは、児童虐待による殺人事件という重いテーマの作品、『ある少女にまつわる殺人の告白』の魅力を力強く述べた。最後の発表者、井谷さんは、中国の難解なSF作品、『三体』の魅力をユーモアを交えながら朗らかに語った。

発表終了後、投票により１位は古賀さんの作品に決定し、４人それぞれが個性あふれる発表をした本会は幕を下ろした。

編集後記

最後まで記事を読んでいただき、ありがとうございました。私は今より新たに委員長となりました。委員長としての活動は、以前より何倍も大変で、今までの裁量では難しい場面もありましたが、無事完成させられたことは、ひとえに委員と編集活動にお力添えくださった方々のお蔭です。記念すべき本校創立百周年の年度にこの新聞を完成させられたことに対する喜びと誇りを感じています。

学校新聞というのは、生徒が主体となり、どんな記事・内容なら学校や地域を盛り立てていけるのかという思いで筆を取ります。記事を書いていくなかで、魅力を伝えるのと同時に私たちは新たな魅力に出会うことができます。連綿と続く本校の新聞作成を後世へ伝えていくため、私たちは歩みを、筆を止めずに努めていきたいです。

（大竹　翔）

【編集員】
２―１　鈴木　樹
２―２　中西　晴香
２―４　大竹　翔
２―４　瀬谷太志朗
２―６　金澤　桜介
１―２　森本　哲平
１―３　柳沼　結太